報告

NPO法人BIWAKO SPORTS CLUB設立記念シンポジウム「環境があれば人は育つ―スポーツNPOの可能性（挑戦）」を開催して

海老島　均[1]　辻　憲一郎[2]　久保　幸平[2]

はじめに

2009年４月18日（土）に本学大ホールにて，BIWAKO SPORTS CLUB（以下BSC）がNPO法人として認可されたのを記念して，標記のシンポジウムが開催された．当日はクラブ関係者に加え，本学並びに近隣大学関係者，近隣地区の行政及び体育協会関係者，約150名が集まり，国内有数のスポーツNPOの代表３名を招いて，講演，パネルディスカッションが繰り広げられた．

第一部では，基調講演として，テレビ朝日放映「報道ステーション」等で取り上げられ全国的に有名になった，NPO法人「グリーンスポーツ鳥取」のニール・スミス代表が「芝生が生み出した子どもの笑顔，人の輪」というテーマで講演を行った．

第二部では，BSCの代表でもある筆者の司会で，スポーツ団体として日本で初めてNPO法人になった「北海道バーバリアンズ・ラグビーフットボールクラブ」理事長，田尻稲雄氏，NPO法人「瀬田漕艇倶楽部」監事で元ボート日本代表チームのヘッドコーチ古川宗寿氏に，基調講演を行ったスミス氏が加わりパネルディスカッションが展開された．以下，当日の内容をまとめる．

第一部　基調講演

「芝生が生み出した子どもの笑顔，人の輪」ニール・スミス（NPO法人グリーンスポーツ鳥取代表）

1．日本の中の砂漠「学校の校庭」

日本は緑豊かな国である．ただ航空写真等をみると，必ず砂漠のような緑が欠けた部分が見られる．それが学校の校庭であるというのは驚きである．子どもたちから遊びを奪っているのは，そのような環境である．そうした場所において子どもたちが笑顔でいられるはずがない．土の校庭を観察すると，子どもたちが本当に体を動かすことができていないことがわかる．当然の結果として体力が落ちている．体力がない子

(1) びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ学部生涯スポーツ学科教授
(2) びわこ成蹊スポーツ大学スポーツ開発・支援センター研修員

どもたちが，どうやって国の未来を支えるのか？　今の環境を変えないと，この傾向は変わらないだろう．

2. 芝生が子どもたちの運動環境を変える

芝生があれば，幼少の頃から子どもたちは自然と体を動かす．子どもたちは芝生の上で，自然と笑顔になる．自分たちが管理するグリーンフィールドで遊ぶ子どもたちを見ていると，自然と体力がついているのがわかる．芝生化した幼稚園，保育園でも同様だ．（園庭を芝生化している）保育園に迎えに来た親が，園庭で遊んでいる子どもがなかなか帰ろうとしないと言っていた．

芝生は滑るという話を聞くが，裸足で遊んでいる子どもが，足の指全体を使っているとそんなことはない．むしろ足の指の成長にとっては好ましい．芝生化している学校の写真を観察すると，明らかに子どもの動きが違う．芝生化した学校の校長先生の話によれば，「喧嘩が少なくなった」「靴隠しのようないじめが減った」「運動をしなかった女の子が運動するようになった」「漢字を覚える量が増えた」など，予想していなかった芝生化によるであろう効果が出たそうだ．

3. 競技力向上と芝生のスポーツ環境

子どものころから芝生でラグビーやサッカーを行ってきた選手たちと，日本のように土の上でこれらのスポーツをしてきた選手たちの動きは全く異なってくる．子どものころから芝生でスポーツをしてきた選手たちは転ぶことに恐怖心がない．それが一般的に日本選手に欠けていることである．

4. 芝生って何？

肝心なことは芝生と草を区別しないこと．両方とも英語ではgrassである．

定義するならば，「種類を問わず，草や芝を頻繁に刈って出来上がった転んでも痛くない絨毯のような状態」である．１㎡の年間の管理費が2,000円の場所（国立競技場等）でも50円で管理しているグリーンフィールド（鳥取市）でも状態はそれほど変わらない．ただ国立競技場の場合ほぼ１種類の芝生の種（ティフトン）で構成されているのに対して，グリーンフィールドには少なくとも15種類の異なる草が生えている．それでも刈りこめば十分使用に耐える．千代川（鳥取市）の河川敷で，草ぼうぼうの状態だったところを，自発的に週１回刈るだけで，充分「芝生」の状態になっている．要は，自然に育った草を週１回刈りこめば，先程定義した「芝生」の状態になる．誰が使用するかによって芝生のグレードが違ってくる．確かに超一流の選手には，超一流の芝生が必要である．子どもたちや普通のスポーツ愛好家には，超一流の芝生でなくても十分だと思う．日本にはその中間的な芝生がないところが問題である．

5. 鳥取方式による芝生の育成方法

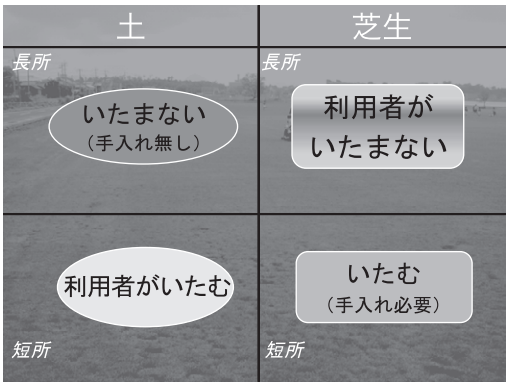
（グリーンスポーツ鳥取ホームページ参照：http://www.greensportstottori.org/）

6. 日本のスポーツ環境の問題点

本来英語の意味では，スポーツは「時間を楽しく過ごすこと」なのだが，広辞苑では「遊戯・競争・肉体的鍛錬の要素を含む身体運動」とされる．英語の概念で行われるスポーツにおいてはできるだけ多数が参加し，その中から自然と強い選手が生まれる環境がある．それに対して日本の環境では一部の限られた集団からハードトレーニングによって選手が生まれてくる構造がある．ところがラグビーを例にとると国際的に結果が出ていないようだ．日本の中学校・高校のラグビー部では一年中，毎週４～５回，１回の練習で２～３時間，年間にすると平均約500時間練習している．それに対して，ニュージーランドの高校のラグビーでは，多くても週２回の練習，シーズン制なので，秋から冬だけの活動，結果年間平均約150時間にとどまる．子どもの時から，シーズン制によって最低２種目，多い人では４～５種目ものスポーツに慣れ親しんでいく．才能のある子どもたちは大人になり複数種目の国代表になったりする．子どもたちの可能性は限りなく大きい．日本の部活動では１種目に限定してハードトレーニングを積んでいく．種目によっては真夏のような活動に適していない時期でも練習を続ける．その結果熱中症等で亡くなる子どもいる．つまり年間を通して季節性のなさ，間違った練習方法によって行われている日本の部活動が，間違ったスポーツ環境を作り出しているといっても過言ではない．

7. まとめ：日本に多い土の環境と芝生の環境との比較

土と芝生を比較すると下記の表のようになる．



芝生の短所として，「いたむ（痛む，傷む）」ことが挙げられるが，実は短所であって長所なのだ．芝生がいたむことによって，利用者がいたまない状況を作り出しているのである．同様に土がいたまないという長所は，長所であって短所．つまり利用者がいたむから土がいたまないのだ．結局のところ，芝は緩衝材であって，それ以上でもそれ以下でもない．

第二部　パネルディスカッション

1．最初にNPO法人北海道バーバリアンズ・ラグビーフットボールクラブとNPO法人瀬田漕艇倶楽部の概要を各自が説明した．

田尻稲雄（NPO法人北海道バーバリアンズ・ラグビーフットボールクラブ理事長）

（1） クラブの文化は一朝一夕ではできない

総合型地域スポーツクラブ振興において，文部科学省は結果を急ぎすぎている．本クラブができてから35年たって，ようやく形になってきた．1987年に初めてのニュージーランドに遠征して驚いたのは，①多くの60，70代の人たちがラグビーをしている　②近所の人たちがクラブハウスを訪れて，プレーの良かったところなどを話している　③クラブハウスでお酒が飲めるということだった．この遠征以来，ニュージーランドのようなクラブづくりが目標となった．現在200名の部員を抱える．チームドクターや弁護士もいて，様々な役割分担がされている．2007年には，念願のグラウンドとクラブハウスを所有するまでになった．

（2） クラブの提供する種目

地元在住オーストラリア人が中心となったクリケットのクラブのメンバーから，一緒にやらせてくれないかという申し出があった．そのため多種目総合型という形になったが，スポーツクラブというのはそういうものではないか？　最初から，特定の種目を集めてみても上手くいかないのではないか？　当クラブでは冬はクロスカントリーのスキーもしている．

（3） クラブの強化のための組織づくり

強化の仕組みも，自分たちだけで完結するのではなく，サポートしてくれる人を巻きこんで，ボランティアとして協力してもらう．NPOは資金不足であることを理由に，奉仕の精神で何かをする喜びを感じてもらうのだ．NPO活動を宗教法人の域にまで引き上げようとしている．

（4） リタイアさせない仕組みをつくる

家族を巻き込む．循環型クラブを作り上げてきた．生涯スポーツは「ゆりかごから墓場まで」だが，当クラブのキャッチフレーズは「酒場からグラウンドまで」「グラウンドから酒場へ」．つまりスポーツとプラスアルファの一体化を目指している．オーストラリアから来日したチームとイベントをしたり，体育館でバーベキューをしたこともある．このような体験を子どもの時代からすると，確実に意識が変わる．

（5） 行政に依存しない発想の転換（逆転）

当クラブ所有のグラウンドをパークゴルフ場として無償で行政側に貸出している．一般には行政からグラウンドを借りるのものだと思われているが，自分たちはスポーツ文化を作っているのだという自負がある．自分たちが好きな（得意な）ことをやってその見本を行政に示しているつもりである．これぐらいの気概がないと，行政依存から脱却できない．小学校，中学校のグラウンド芝生化に協力したり，グラウンドの周りに桜の木を植え

て桜の名所にしようとしたり，地域コミュニティへの貢献も行っている．行政にお願いしたいことは，より多くのNPO団体に対しての寄付金控除，つまり，対象となる認定NPOの認定を簡素化してほしいことだ．スポーツNPOへのお布施（寄付金）を認めてほしい．そうでないと，スポーツ文化が定着しない．

古川宗寿（NPO法人瀬田漕艇倶楽部幹事，元ボート日本代表チーム，ヘッドコーチ）

（1） クラブ発展の経緯

1977年のクラブ設立から32年間活動してきた．自分が日本代表のコーチとして世界選手権で海外に遠征する際に，各国の地域クラブを見て帰ることを課題にしてきた．

日本のスポーツクラブは汚い（不潔）というイメージがあったから，カナダのクラブを見て驚いた．こうした海外のスポーツクラブを目標にクラブを作ってきたが，日本には河川法（洪水対策）があって，ボートハウスが建てられない．様々な障害はあったが，クラブ員の手作りによって，今のクラブハウスができた．日本の総合型地域スポーツクラブ構想ではヨーロッパ型スポーツクラブを目指しているが，実際は小学校の施設を使って活動しているし，無理があるのではないか．

（2） 水上型総合型地域スポーツクラブ

水に縁のあるスポーツ（ボート，カヌー，ドラゴンボート）で総合型スポーツクラブを作っている．総合型にしようとした背景には，文部科学省からの補助金という理由もあった．「Head of Seta」や「びわこ市民レガッタ」などの市民レースを主催し，競技普及にも努めている．

（3） クラブ活動の紹介

（瀬田漕艇倶楽部ホームページ：http://www.setarc.jp/　参照）

（4） 日本のスポーツ環境，クラブの問題点

日本のスポーツクラブは学校や企業に依存するパラサイト型である．スポーツが自立していない．組織が横断的，帰属組織内型であり，生涯的，地域的組織とはいえない．スポーツが本当に好きな人が育ちにくいシステムである．日本の現存する地域スポーツクラブではトップを育てるシステムができない．地域スポーツクラブは経済的自立と組織的運営の確立，指導者育成等に取り組み，チャンピオンスポーツへの挑戦をしてほしい．トップ選手が育たないクラブは一人前でない．

2．3名のパネリストによるディスカッションのうち，主だった項目に関する論点をまとめる．

（1） NPOを目指そうとした理由とスポーツNPOと文部科学省が推奨している総合型地域スポーツクラブとの違いについて

NPOを目指そうとした理由に関しては，グリーンスポーツ鳥取の場合，自分たちが自由に使えるグラウンドを持ちたいという

のが出発点であった．資金がなかったため，県有地を借り受けて芝生化して使用し，地域住民に還元する形をとった．北海道バーバリンズの場合，YCAC（Yokohama Country & Athletic Club:1868年に創設され，社団法人として活動しているクラブ）に影響を受け，法人システムを目指したのがきっかけであった．自己所有のグラウンドとクラブハウスという目標があったのが原動力となった．瀬田漕艇倶楽部の場合，少し観点が違っていて，長年任意団体として活動しているうちに，運営資金が肥大化し，個人名義だけでは会計等に支障をきたし，法人化したという経緯がある．

行政主導で進めている総合型との違いに関しては，スミス氏から「ニュージーランドでは総合型はあまりない．それぞれ単独種目で活動して，自然な形で発展して種目が増えるのは良いが，行政から押し付けられた形では上手くいかないだろう」と意見が出された．田尻氏はNPO化に関して札幌市に協力を求めたときに，「体協のコピーみたいな形の総合型クラブは，あまりお勧めしない」と逆に言われたエピソードを紹介した．

（2） 生涯スポーツの実践に関してどう考えるか？

3名のパネリストとも50代，60代となった今も，熱心に競技スポーツに取り組んでいるという共通点を持つ．この熱き思いがクラブの求心力になっているといっても過言ではない．この問いに関しては，3名の言葉をそのまま引用した．

スミス：スポーツをやっていない人生は想像できない．子供のころから，水泳，サッカー，テニスなどいろいろやってきた．生活環境が変わればそこにあったスポーツをする．そのほかにも卓球をしたり，ゴルフにはまったこともある．今は，体が要求するスポーツがラグビー．夏は犬と海辺で遊ぶ．気分転換にも，ストレス発散にも，仲間との交流にもなる．体を動かすこともできる．いつまでやれるかなんて考えたこともない．ただ何だかの形で自分の生活の中にスポーツがあることは重要である．しかし，それを100パーセントにするつもりはない．体が動く限りはスポーツをしたい．スポーツがなくなったら人生が本当につまらないものになる．

田尻：うちのラグビーチームには35歳以上のチームがある．そのチームがAチームに入れない控えの17歳，18歳の若者たちのチームと試合をすることがある．試合が終わった後に選手に，「お前，楽しいだろう．自分のおやじみたいな年代の人と試合をできるんだから」と伝える．私の友人たちも50代，60代が多いが，いまだに競技に対する情熱を持ち続けている．61歳になるある友人が，先日スパイクのインナーソールを交換して，走りがまったく変わったと語っていた．61歳ですよ！　若いメンバーたちは彼らを見て，「あいつらきっと死んだらグラウンドに散骨するぞ」と言っている．こ

れで，自分たちの宗教法人の名称は決まった．「青芝散骨教」である．若い連中から年寄りまでこうした話で盛り上がる．皆で集まって，試合のビデオを観ながら酒を飲む楽しさといったらない．自分は青芝散骨教の信者として，お布施を続けなくてはならないと思っている．

スミス：我が子と一緒にスポーツができることは本当に最高である．先日自分の誕生日にラグビーの試合があり，東京からたまたま息子が遊びに来ていて，息子はサッカー少年でラグビーはやらないのだけど，人数が足りなくて引っ張り出した．試合では自分がトライをしたのだけど，そのとき後ろから押しこんでくれたのが息子で，試合中，「親父，誕生日おめでとう！」と言ってくれた．本当にもう最高！幸せだった．

古川：ボートはラグビーと違って，持久走的な要素が強く，勝利は運動生理学的に説明がつく．だからいくら年寄りがいきがっても若者に勝てない．私はかつて日本のチャンピオンだったけど，歳をとると，かつて簡単に勝っていた相手にも勝てなくなってくる．だから自分のボート人生はギアチェンジの連続である．今も腰が痛くて，更なるギアチェンジが求められている．勝負はやめようと思っている．私にとっての生涯スポーツは，先ほど宗教であるという話があったが，ボートという慢性のウィルスに感染したようなものだ．このウィルスをできるだけ世間に撒き散らしてやろうと思っている．自分は仲間との交流や大自然との触れ合いなど，半世紀を通じて，素晴らしい体験を積み重ねてきた．その体験によって（ボートを）やめられなくなっている．このウィルスを若い人に撒き散らしたいと思っている．つまりボートをやめられなくするのだ．勝った負けたばかりの学校スポーツではこうしたことは体験できない．日本のレースはマスターズのレースが普通のレースのおまけのような形で行われている．これは間違っていると思う．ほとんどのスポーツで，競技選手であるのは人生のほんの一瞬で，後は生涯スポーツとしてスポーツを楽しまなくてはいけない．ボートレースの場合，95パーセントが一般の競技レースで，残り５パーセントが自分みたいな変わり者がやっている．この比率を逆転させてやろうと思っている．琵琶湖を（ボート）通勤の場とすることを自分で実践して，広告塔になろうと思っている．

（３） 行政を動かすためには何が必要か？

フロアからのこの質問に関しては，３名から厳しい意見が出された．あるパネリストは，「行政主導でスポーツクラブはできない．主役になろうとしても無理」と言い切った．自分がスポーツもやっていないのに職員であることが疑問であり，スポーツに情熱を持たない（行政）職員に関与してほしくないとの意見も出された．仕事を定時（９時から５時）で終わらせ，火の使用や飲酒に対する禁止など規制が多い状況では真のクラブ文化は作り出せない．「沢山の人が

集まって，スポーツの後にバーベキューなどで盛り上がった時の楽しみは，経験した人でなければ分からない」というコメントも出された．北海道バーバリアンズでも，グリーンスポーツ鳥取でも，自分たちが自助努力で作り出したスポーツ環境を，逆に行政側に提供するという逆転現象がみられた．市民にもスポーツ環境づくりに対する気概が要求されている．いつまでも行政依存では日本のスポーツクラブの環境は変わらないとの提言がなされた．

まとめ

草の根スポーツ愛好家の集まりからスポーツNPOへと発展した組織の中で，日本有数といえるNPO団体の代表者が集結したシンポジウム開催の意義は非常に大きかった．NPO法人BIWAKO SPORTS CLUBが目指すべき方向性に関しても多くの示唆を得ることができたと思われる．ニュージーランドの芝生のイメージを具現化しようとしたグリーンスポーツ鳥取，ニュージーランド遠征によってクラブの目標を明確にした北海道バーバリアンズ，カナダ，オーストラリアのクラブとの交流を通して発展した瀬田漕艇倶楽部．いずれの場合も海外に定着しているクラブ文化，スポーツ文化への憧憬が大きな原動力になっていることが共通している．文部科学省は2010年までの10年間で総合型地域スポーツクラブづくりを推進してきた．その結果，日本に3,000を超える新たな地域クラブが誕生したが，その多くがクラブ文化を醸成していく上ではスタートラインに立ったばかりである．シンポジウムでもクラブ文化は一朝一夕にはできないことが異口同音に強調された．真のスポーツ愛好家が中心となり，自分たちが本当に楽しめるクラブ構造を完成させた時，そこに自然と人が集まり，コミュニティが確立されるのではないか？　生涯にわたって真にスポーツを愛し，日常生活において自然体でスポーツを続けていくスポーツの生活化．それを具現している3名のシンポジストのような生きざまが，クラブ文化を作り上げていく核となることが本シンポジウムで確認されたと言えよう．